ブリューゲルの「子供の遊戯」3

―ブランコ遊びから目隠し鬼ごっこまで―

森　洋子

8、ブランコ遊び Schommelen（図1）

仮面遊びをする男の子と同じ二階の部屋で、梁にロープを結び、ブランコ遊びをする女の子の姿がみられる。側で男の子が、その背を押しているが、今にも勢いがつきすぎ、二階から落ちそうである。オランダでは今日でも、打禾場の上の穀倉が、ブランコの最適の場とみなされている。

H・ベットの主張によると、ブランコは多くの未開民族では厳かな宗教的儀式として遂行されたという。バルティック海沿岸のレットランドの農民たちは、ブランコで高く上れば上るほど、亜麻の丈が高くなると信じていた。(注1) もちろん、ブリューゲルの「ブランコ遊び」にはそうした儀式的意味はなく、単なる春夏の楽しみとして登場しているだけである。

なお、ステラの画（図2）では、二人の童子（ブリュート）が一台のブランコに乗っているが、その余白の詩にはこう記されている。

「ブランコは、人が昼も夜も過すことのできる楽しみ。
しかし地面に落ちないように注意しなさい。
なぜなら、腕白者がひっくり返り、

図3　T, J. ウェインホーヴェン・ヘンドリックセン「ブランコからの落下」（子供版画シリーズより，1832—1849年）

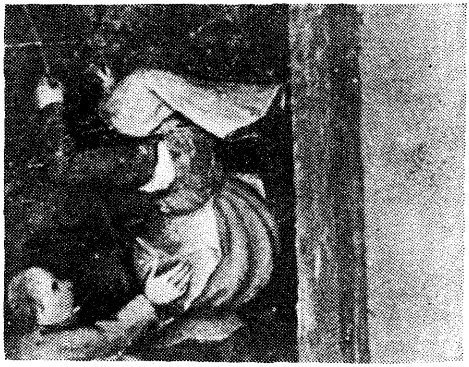

図1　ブリューゲル「ブランコ遊び」（「子供の遊戯」の部分⑧）

その背中がガラスで出来ていたら、そこは砕けるであろうから。（注2）」

事実、十六世紀のオランダのタイル画にブランコからの転落を描写したものがある。（図3）。そこには「この可哀想な悪童はブランコから落下する」と記されている。

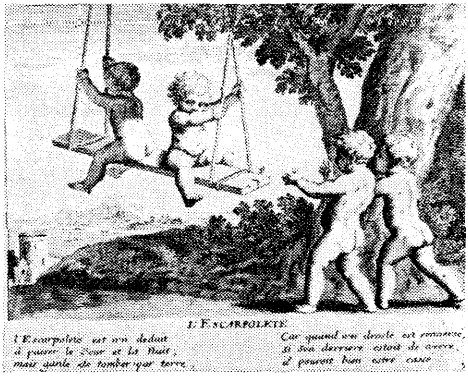

図2　クローディン・ブゾネ・ステラ「ブランコ遊び」（ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より）銅版画

図4　ブリューゲル「ナッツの穴あけ遊び，またはナッツの風車遊び」（「子供の遊戯」の部分⑨）

9、ナッツの穴あけ遊び、またはナッツ風車遊び De Drilnoot of het Notenmoleken（図4）

風車の国ネーデルラントに適わしい子供の遊びである。テーブルの囲りには様々な年齢の男の子が遊びに夢中になっている。そのうちの一人が台の上に上がり、ナッツの穴あけとかナッツの風車遊びを楽しんでいる。短くなった上衣の下から、白いシャツが見えているのも、画家の観察の目をうかがわせる。玩具の作り方はナッツの上下に二つ、その中間の脇に穴をあけ、中味をすっかりとり出す（図5）。それから真中が細くなった紡錘に紐を結び、それを下から上の穴に通し、紐の方は脇の穴から取り出す。紡錘の先が抜けないように、小さな横木をつくり、棒の先きに風車の羽根をつける。遊び方は、軸となった紡錘をぐるぐる回すと、紐はどんどん棒に巻かれる。それからその紐を水平に強く引張ると、羽根が一緒に回る、という仕組である。

この遊びは、ラブレーのガルガンチュワ物語の第二十二章、ガルガンチュワの遊戯に「風車」として列挙されている。

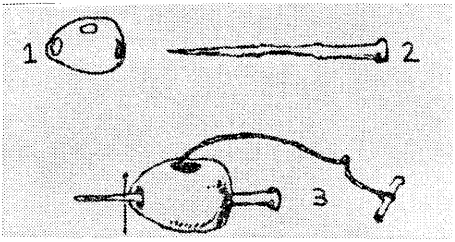

図5　ナッツの風車の作り方（ハルトマン＝レンス『おーい，外で遊ぼうよ』）

10、シャボン玉 Zeepbellen blazen（図6、7）

頭に三角形の菅帽子を被った青い服の男の子が、シャボン玉遊びをしている。空中で吹くのではなく、把手つきの受皿に液体を入れ、直接その中でふくらませている点が、日本の遊び方と異なるようである。しかしこのやり方は十七世紀においてもポピュラーだったことが知られる（図8）。この男の子の使うストローが芦

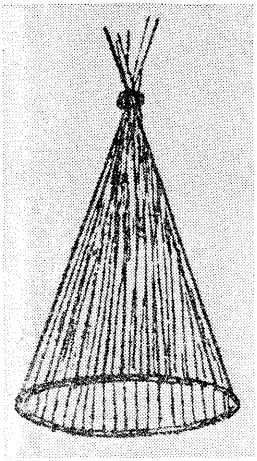

図7　菅帽子（ハルトマン＝レンス『おーい，外で遊ぼうよ』p.26より）

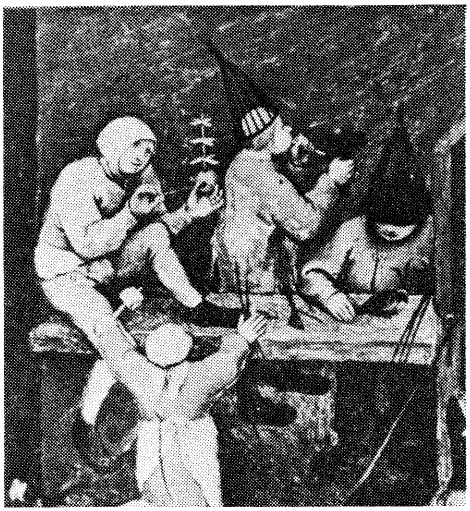

図6　ブリューゲル「シャボン玉」（『子供の遊戯』の部分⑩）

か麦わらの菅かは分からないが、かなり太目であり、しかも先を一センチほど十文字に切って使ったらしい。

コックとテールリンク共著『南ネーデルラントの子供の遊戯と楽しみ』によると、オランダ各地で合わせておよそ二十種類の呼び名があるという。(注3) 例えば、十七世紀では「泡吹き」といってカッツ（一六二五年）は Bobbels blazen、アモン（一六五七年）は Blatern blasen と呼んでいた。

十六世紀の寓意画集に謳われる「シャボン玉」の例に注目してみよう。例えば、アドリアーン・デ・ヨンゲの『メディチ家の寓

図8　E. シリマン「シャボン玉」（カッツ『結婚について』1642年より）銅版画

意画集』（一五六五年）では、「全てをつかまえようとするのは愚かなことだ」という題銘のもとでこう書かれている。

「もし子供が空気の中を飛ぶ風のように軽いシャボン玉を捉えようとすれば、その努力は無駄なことだ。もし人が多くの、様々な研究を志向し、または不確かな栄誉を追い求めるならば、その者は私にとっては子供よりももっと愚かである。」(注4)

ほかにダニエル・ハインシュウスの『キューピットの仕事』（一六一五年）でも、「軽いシャボン玉は無から生まれ、玉ができるや否、多くはふたたび失なわれていく。汝が選ぶ人の寵愛というものもこれと同様である……」(注5)という風に、教訓の色が濃い。

他方、カッツはかなり教訓的な意味をこめている。

「シャボン玉を吹く子供よ、注意しなさい。
どんなにかそれが驚くべきことか、
ひじょうに大きくふくれた玉もほんの一瞬しか持続しない。
最大限にふくれても、
それは地面に落下してしまう。」(注6)

つまりカッツは一時的な繁栄の後に来る大きな下降を警鐘していた。

またつぎに引用するステラの詩「シャボン瓶」（一六五七年、図9）には、明らかに大人の世界の争いを比喩的に謳っている。版画の画面には、一人の童子がシャボン玉を吹くと、他の子供たちが帽子でそれを受けとめたり、またシャボン玉の奪い合いで喧嘩をしている情景がみられる。

「ここでは子供たちが、シャボン瓶をとりあって、
本気で喧嘩する。
まるでそれが金貨であるかのように。
しばしば大人の世界でも、
沢山の本当に些細なことのために、

図9　クローディン・ブゾネ・ステラ「シャボン瓶」（ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より）銅版画

喧嘩が起こるのをみる。」(注7)

このように、すでにブリューゲルの同時代、しかもデ・ヨンゲの『メディチ家の寓意画集』のように、アントウェルペンのクリストフ・プランテイン(本誌五月号、四九〜五〇頁参照)で出版された書物の中に、シャボン玉の虚無性を語っている例が見出される。しかし、ブリューゲルの画面全体を見たとき、この子供の営みにそうした寓意が含まれているかどうか、いずれ後に論述してみたいと思う。

11、小鳥遊び Het Spel met den Vogel (図10)

薄紫色の服を着た男の子がテーブルに坐り、小鳥に餌を与えている。古くからの習慣によると、この鳥はムーフ鳥らしいが、この絵では赤い鶏冠がついているので、断定はできない。この画面でも、鳥の足にはおそらく紐が結んであるのであろう。十七世紀の銅版画(図11)をみると、当時、少年たちは小鳥の足に紐をつけ、飛ばして遊んでいた。

図10 ブリューゲル「小鳥遊び」「石が脚にあたるぞ」(「子供の避戯」の部分⑪⑬)

十六世紀のドイツの詩人ガイラー・フォン・カイザーベルク『ざくろの書』では、少年のこうした行為を詳細に描写している。

「少年が雀をつかまえて、その足に一アーム(腕の長さ)か二、三アームの長さの糸を結んでおく。それから雀を飛び放たせるが、その手に糸をもっている。雀は飛び立ち、遠くに飛び去ることができると思うとき、少年はその糸をたぐりよせ、

図11 E. シリマン「小鳥遊び」(カッツ『結婚について』1642年より)銅版画

雀を下へ降ろしてしまう。」(注8)

さらに鳥を飛ばす遊びについて、同じくカッツは「高くはいけない」という詩でこう書いている。

「遊びに行く男の子は、紐につけた雀を手にしている。
鳥があまりにも遠くへ飛ぶと、
彼はすぐこう叫ぶ。『高くはいけない。』
雀がそれでも行こうとすると、
彼は紐を引張り下ろす。
人間よ。どこへそんなに高くめざすのか。
汝はその欲望の目をどこへ動かすのか。
汝にとって海と野原が広がっていても
各自にはその境界の杭が打たれている。
汝の紐が終ったとき、
どんなに走っても無駄なのだ。
遠くに飛ぶなかれ、至福の人間よ。
汝の棒が届くところまで。」(注9)

さらにカッツは、餌のために人間に飼われている鳥についても教訓詩を書いている。

「雀は紐から放されても、
また少年の手にもどってくる。
それはわずかな餌のため、
全く鳥は愚かである。
野原で元気に、熱心に餌を探した方がよかったのに。
そこでいくばくかの穀物を探し、
飢えに打ち勝ち、
永遠の奴隷となる紐を恐れる代わりに。
これ以上、何を説明する必要があろうか、
私の考えでは、これで十分に云いつくしている。」(注10)

コックとテールリンクの研究では、少年たちの飼いならす小鳥の種類を列挙している。それらは雀、やまがら、歌鳥（つぐみ科）、椋鳥、かささぎ、鴉、種々の鶯などであった。(注11) ラブレーも小鳥の遊びとして「雲雀鳴き」を挙げている。

12、ガラガラ遊び De Klater（図12）

赤い服をきた女の子が左手にガラガラ、右手に二本の菅をもって、テーブルの前に立っている。菅はおそらく、菅の帽子をかぶった男の子のためのものであろう。ガラガラは、小箱の中に小石とか桃や桜ん坊の種を入れ、棒につけて鳴らすのである。コックとテールリンクの研究によると、当時のこうした小箱は一種の独

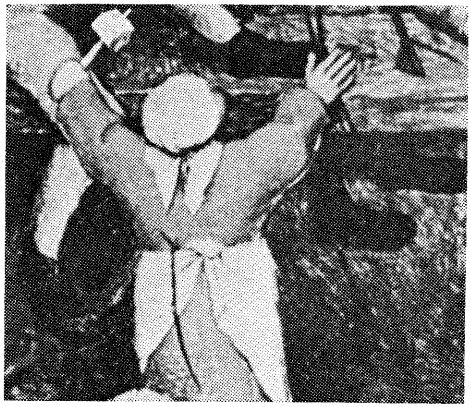

図12　ブリューゲル「ガラガラ遊び」(「子供の遊戯」の部分⑫)

楽のような形で、四面体ないし六面体のプリズムから成っている、という。各面には番号がふってあり、拇指と中指で棒を回すと、プリズム面が回り、一番上になった面の番号が、その子の得点になるのである。(注12)

13、石が脚にあたるぞ Steentjes om het Been (図10)

11番の菅帽子の男の子が坐るテーブルの横に赤い紐が巻かれ、その先端に一個のレンガが結ばれている。この遊び方は、輪になった仲間たちの真中で、一人の子供が紐の先をもって、レンガを振り回すと、仲間たちは石が脚にあたらないように跳び上がる、というものである。(注13)

右はド・マイヤーの説明であるが、ハイディンクは、紐で結ばれたレンガは子供たちにとって犬や馬を意味している、と記している。(注14)

14、洗礼ごっこ De Doop (図13)

四人の女の子たちが洗礼ごっこをしているが、彼らは鵞鳥行進とよばれる一列縦隊の行進をしている。先頭の女の子が人形を青い布でくるんで、大事そうにかかえているが、それは受洗者である乳児をあらゆる悪事から守るという迷信による。彼女と次の女の子の二人は、ヴェールの代わりに長いスカート

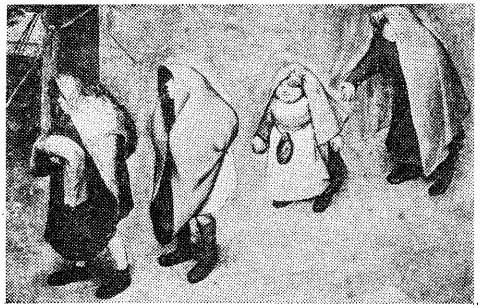

図13　ブリューゲル「洗礼ごっこ」(「子供の遊戯」の部分⑭)

をまくって頭にかぶる。下着の白、スカートの裏地の黄色や赤が見られ、色彩的である。他方、後の二人は本物の青いヴェールをかぶっているが、頭上でその一端が結ばれているのは、ずり落ちないためである。

ところで三番目の一番幼い子供は、両手に何かを握っている。ハルトマンとレンスの推定によると、彼女は代母の役をするのであり、古くから洗礼式では式の後、代母（または代父）が子供たちにお菓子を投げ与える習慣があるという。その時は教会での謹厳な雰囲気が突然破られ、子供たちは歓声をあげ、お菓子に群がるという。(注15)

なお、ネーデルラントにも該当するかどうか分からないが、ドイツの農村では洗礼に関する種々の迷信がある。サルトーリによると、一般には産婆が洗礼をうける乳児を抱いて教会へ行くが、その時彼女は主要道路を通らなければならないこと（決して脇道とか庭道ではなく）、さらに身内たちは鶴鳥行進をしなければならないこと、悪魔祓いのためにある特定の色の衣服を着ていなければならないこと、代父や代母は洗礼式には贈物を持って行き、一定の儀式を行なうことなどである。(注16)

15、目隠し鬼ごっこ Blindemannetje（図14）

左側の家の屏の前で、七人の男女の子供たちが目隠し鬼ごっこをしている。まず数え歌で鬼になった子は、青い布を頭からすっぽりかぶり、目隠しされ、ぐるぐる回されるため、方向感覚を失う。それからゲームが開始する。鬼は輪になった子供たちの真中にいることも、輪の外を廻ることもある。一人が近づき、鬼がその子の名を云い当てたら、鬼を交代する。なお、このブリューゲルの遊び方に近いものとして、アドリアーン・ヴァン・デル・ヴェンネの銅版画（部分、図15）がある。ここでは目隠し鬼が仲間をつかまえようと追いかけている情景が描写されている。

図14　ブリューゲル「目隠し鬼ごっこ」（「子供の遊戯」の部分⑮）

この遊びはすでに古代ギリシャ時代から知られ、ミュイア・カルケ（青銅の蠅）と呼ばれていた。ベーメの

図15　アドリアーン・ヴァン・デル・ヴェンネ「目隠し鬼ごっこ」（カッツ『結婚について』1642年より）銅版画

説明によると、子供たちは目隠しされた鬼の回りを陽気に声を立てて飛びはねながら、鬼との間にこう対話をする。「わたしは青銅の蠅を追う」「そうだよ。君は追いかけるが、つかまえないよ。」(注17)

ネーデルラントでのこの遊びはフランスのコラン・マイヤール Colin Maillard と称される同種の目隠し鬼ごっこに起源がある、ともいわれる。十世紀の頃、戦争の最中、コラン・マイヤールという名の騎士が負傷し、盲目になった。彼の死後、騎士たちがマイヤールの名に因んだ目隠し鬼ごっこを案出し、ひじょうに盛んになったということである。この遊びはまたブルボン王朝のアンリーの宮廷においてとくに愛好された。(注18)

またドイツでは「めくら牛」Blinde Kuh と呼ばれ、「めくら牛、お前を連れてってやるよ」「一体どこへ」などという歌のやりとりをする。歌の最後では子供たちはめくら牛に「スプーン」を探すように命じ、鬼につかまった子供は「スプーン」といわれ、新しい鬼になる。

英語では「めくらの殴打」Blind-man's Buff（ただし Buff は野牛の意味もあるが、ここでは殴打）とも呼ばれる。ヒエロニム

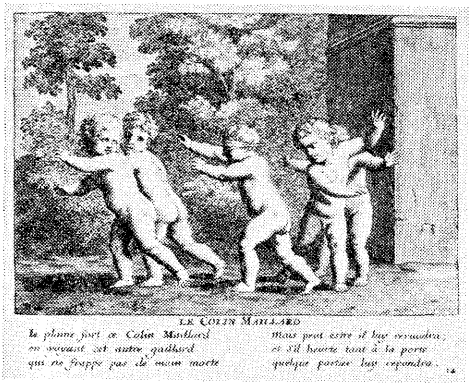

図16　クローディン・ブゾネ・ステラ「目隠し鬼」（ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より）銅版画

ス・ボス（一四五〇頃～一五一六）の油彩画「聖マルティンの祝祭日」（現在紛失）は、十六世紀後半、タピストリーに織られた。その図柄は、仕切られた柵の中に豚が放たれ、盲人たちが杖を持って、豚を追うという見せ物を表わしていた。もちろん見物人は盲人たちが豚の代わりに、誤って仲間の盲人を殴打するのを見て興じたのである。ゆえに「めくらの殴打ごっこ」というのは中世のこうした興行にも起源があるかもしれない。

ジャック・ステラの詩の中に、「めくら鬼を打つ」という行為の遊びが書かれている。

「私はもうひとりの悪童を見ると、
めくら鬼（コラン・マイヤール）にとても同情する。
あの子は死人の手ではなく、強く打つから。
でもめくら鬼は多分あの子に仕返しをする。
もし扉をどんどんたたくならば、
だれか門番が彼に返事をするだろう。」（注19）（図16）

なおシンガーはさらに、本来、この〝目隠し〟という行為に民間伝承的な古い守護霊信仰の名残りがあるのでは、と推測している。つまり、恐しい獣のような霊が人をつかまえにくくするために、あるいは霊の悪意ある眼光を覆うために、その霊に目隠しをする、といった意図があったと説明する。（注20）しかし、いまここでのブリューゲルの〝遊び〟にそれほど歴史的に深い繋がりがあったとは思えないのである。

（続く）

注1 H. Bett, *The Games of Children, their Origin and History*, London 1929, p. 53ff. 同じくニルソンも古代ギリシャではブランコが青少年の祝祭の儀式のひとつ、つまり豊穣の祈りと関連あることを指摘している。
Nilsson, *La Religion populaire dans la Grèce antique*.

注2 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 9.

注3 A. De Cock en Is. Teirlinck, *Kinderspel en Kinderlust in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1908, Bd. V. 233ff.

注4 Adriaan de Jonge, *Hadriani Iuvii Medici Emblemata* (1565) については Henkel und Schöne, *Emblemata*, Stuttgart 1967, p. 1316.

注5 Daniel Heinsiu, *Het Ambacht van Cupido* (1615) については Henkel und Schöne, *op. cit.*, p. 1316.

注6 Cats, *Houwelyck*, Middelburg 1625, "Kinder-Spel".
注7 Stella, *op. cit.*, No. 8.
注8 G. v. Kaiserberg, *Das buch Granatapfel*, Augusburg 1510.
注9 J. Cats, *Kinder-Spel*, Saint-Omer 1855, p. 78-81.
注10 *Ibid.*, p. 70~73.
注11 Cock en Teirlinck, *op. cit.*, Bd. VI, p. 67-79.
注12 *Ibid.*, Bd. V. p. 206.
注13 De Meyere, Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel den Oude verklaad*, Antwerpen 1941, p. 2~3.
注14 K. Haiding, *Das Spielbild Pieter Brugels*, Berlin 1937, p. 61.
注15 Hartman et Lens, G. Hartmann en E. Lens. *Hééé Jóh!*, Amsterdam 1976 p. 24.
注16 P. Sartori, *Sitte und Brauch*, 1. Teil, Leipzig 1910, p. 33-39.
注17 F. M. Böhme, *Deutsches Kinderlied und Kinderspiel*, Leipzig 1897, p. 418, Nr. 4.
注18 De Meyere, *op. cit.*, p. 3.
注19 Stella, *op. cit.*, No. 12.
注20 S. Singer, *Aufsätze und Vorträge*, "Deutsche Kinderspiele", p. 1.

追記

なお、前、今回に述べた十五の遊びのうち、知人のベルギー人神父W・A・グロータース博士によると、彼がまだ幼かった六十年前に故国で遊んだものがあるという。例えば1の「お手玉遊び」は、中が空洞になった鉛か鉄の距骨のイミテーションを使っていた。また13の「石が脚にあたるぞ」では、レンガや石ではないが、三十センチ位の棒の先にひもを結び、同じ遊び方をしたという。さらに14の「洗礼ごっこ」では、今日でも代父や代母は洗礼を受ける乳児のプレゼントとして、スプーンとかガラガラの贈物をしたし、洗礼のミサに参列する客たちに、Dragée とよばれる乳児を型どった砂糖菓子を箱に入れて贈る、という習慣の反映がある。数年前、筆者がベルギーに約十カ月間留学したとき、お菓子屋さんのショーウインドに飾られた精巧なおくるみ人形のお菓子に驚嘆した思い出がある。

(東京工芸大学)